

純粹倫理を学んでいると、「己を尊び人に及ぼす」や「自他共尊」といった言葉を聞くことがあります。自分を尊ぶ心を養うためには、自身の命がいかに素晴らしいかの自覚を深めることが肝要です。

私たちは、誰しもが両親の血を受け継いで産まれていきます。両親は祖父父母の、祖父父母は曾祖父父母の……と計算していくと、十代遡ると一〇二四人、二十代となると百万人を超える祖先がいることになります。

あくまで計算上での人数であり、様々な事情で祖先の人数が違うこともあるかもしれませんが、それでも想像を超える祖先の命が自分に受け継がれていることが分かります。そのうちの一人でも欠けていたら今の自分は産まれていないことを思うと、己の命がいかに尊いかを自覚できるでしょう。

また、人は幼い時期を一人の力で生きていくことはできず、必ず誰かの支えを受けて成長しています。人によって育った環境は様々ですが、立派にひとり立ちできるまで育ててくれた方々が必ずいるでしょう。直接育ててくれた両親やそれに類する人々はもちろん、お世話になった親族や恩師なども、今の自分にとって欠かせない存在なのです。この事実を自覚することも、自身の尊さを実感できる大切な要素です。

このように、自身のルーツを辿ったり過去を振り返ったりすることで、正しく自尊心を高めていくことができます。しかし、自身を尊ぶということとは、「他者よりも自分の方が尊い」というような高慢な姿勢とは



真の幸福は 「己の尊さ」の自覚から

異なります。なぜならば、「果てしない数の祖先から命を受け継ぎ、多くの人々に育てられた」という唯一無二の尊さは、自分だけでなく全ての人に当てはまるからです。また、食事や睡眠、排泄といった、生きていくために必要な行動をとる際にも、私たちは必ず他者の力を借りています。購入した食材や安心して眠れる住居、衛生環境の良いトイレなどを、全て自ら作り出したという人はまずいないでしょう。

このことを思うと、尊い自分が生きていられるのは、無数の人々の力があつてこそだと気づきます。なんとありがたいことでしょう。こうした自覚に立った時、人のために役に立ちたいという強い感情が湧き上がってくるでしょう。

大衆の重畳堆積幾百千乗の恩の中に生きてるのが私である。このことを思うと、世のために尽さずにはおられぬ、人のために働かすにはおられない。

(『万人幸福の菜』第十三条)

こうした思いに立って仕事をしていると、「多くの人々に生かされている尊い私もまた、尊い誰かが生きることには貢献している」という事実に気づくことができるでしょう。この自覚に達すると、他者の喜びや悲しみをそのまま自分のことのように感じることで、働きを通して人の役に立つことに幸福を感じられるようになります。

お客様に喜ばれる企業になるための第一歩は、己の尊さの自覚にあると言っても、過言ではないでしょう。